福島県いわき市で創業80年の名店と、
東京で活躍する女性経営者の心の交流――

「『今がどん底』と思って、みんなで一緒に頑張ってきました。これからも頑張っていきたい、福島のために」

割烹一平女将
長谷川 雅子 Hasegawa Masako ×
桜ゴルフ社長
佐川 八重子 Sagawa Yaeko

東日本大震災で、福島県いわき市も被害を受けた。長谷川雅子さんが営む料亭・一平にも7～8メートルの津波が店先まで押し寄せ、一時避難を余儀なくされた。だが、そこから前向きに生きていこうと決意し営業再開、福島の女性経営者との交流も深める。「福島のために何かをしたい」という、東京で活躍する女性経営者・桜ゴルフの佐川八重子氏との偶然の出会いもあった。今、被災地はどうなっているのか――。

（司会・本誌主幹　村田　博文）

多くの経済人に愛されるお店

――　長谷川さんは、長く福島県いわき市で料亭を営まれてきましたね。2011年3月11日の東日本大震災以降は復興にも心を砕いてこられましたが、震災の傷跡は深いものがありますね。どんな5年でしたか。

長谷川　当店で板前を務めている夫は、私が心配すると「何とかなるよ。大丈夫だよ」と言ってくれるのですが、売り上げが減ってしまいましたし、私どもの場合には海が駄目になったということが致命傷です。私どもの売りは地魚ですが、全く使えなくなってしまいました。

――　今は全部他県から調達しているんですか。

長谷川　はい。まして私どもは「歩くウニ」の商標登録を取って名物にしていました。日本一とも言われる海藻を食べているウニですから美味しいんです。

――　「歩くウニ」というのは、実際に歩く？

長谷川　ええ。ムラサキウニなのですが、本当に元気よく、縦横無尽に動きます。この「歩くウニ」の命名者が、元福島県知事の佐藤栄佐久さんです。

佐藤さんはいわきがお好きで、よくお越しになっていましたが、ウニをお出ししたところ「これは歩くウニだね」とおっしゃったのです。佐藤さんに「そのフレーズいただきます」と言って、その後、商標登録を取ったところ、見事に当たりました。

――　ところが、今はそのウニが使えないと。

長谷川　未だに使えません。お客様から忘れられてしまうのが怖いですね。今も「歩くウニはできないの？」というお問い合わせはたくさんいただきますが、「ごめんなさい、まだなんですよ」とお答えするしかないのが悲しいですね。

――　割烹一平が、この地で開店したのはいつ頃ですか。

長谷川　私の母、長谷川オコヨがお店を始めたのが昭和13年（1938年）のことです。再来年で80年になり、私の時代でも50年が経ちました。

――　地元を含め、経済人も利用していると聞いています。例えばいわきには小名浜製錬がありますが、日経連会長を務めた三菱マテリアルの永野健さんなども訪れられたそうですね。

長谷川　いわきは1964年に「新産業都市」の指定を受けて、畑や沼地が工業地帯に変わっていきました。堺化学、そして東邦亜鉛小名浜製錬所など続々と建設されたのです。その関係で永野さんは「連続製銅法」という銅精錬技術を持って、いわきで働いておられたんです。当店にも昼食を食べに来られていました。鰻を二段にしたうな重を召し上がっていました。

住宅機器メーカーのクリナップ創業者の井上登さんも、地元のご出身ということで、よくお越しになりました。昭和51年（1976年）に当店に宴会場を作った際に、井上さんが「俺が口開けをする」とおっしゃって、新日鐵（現・新日鐵住金）、松下電器産業（現・パナソニック）の方々をお呼びして口開けをして下さいました。

常磐炭礦もそうです。隆盛の時代には、秋になると社員の皆さんがお越し下さいました。スパリゾートハワイアンズを作った中村豊さん（元常磐興産社長）にも可愛がっていただきました。

――　多くの経営者に愛されてきたのですね。

長谷川　本当にいろいろなお客様に恵まれましたね。ありがたいと思っています。

被災地のためにできることを

――　桜ゴルフ社長の佐川さんが、長谷川さんと知り合われたきっかけを聞かせて下さい。

佐川　お会いしたのは昨年のことです。東日本大震災から4年が経過する中「何か私たちにできることはないか」と、もどかしく思っておりました。

そんな時、福島県女性経営者プラザ（FJP）会長（三田公美子様、当時）より、東京の女性経営者と交流したいというお話が持ち込まれました。そこで、私が会長を務めている東京産業人クラブ女性部会で「福島被災地の女性経営者の声を聞く」を企画しました。

せっかくの機会ですので、当時復興大臣を務めておられた竹下亘さんにお越しいただき、華やかな激励交流会となりました。

――　それが福島県との関係が始まったきっかけですね。

佐川　そうです。その後、現場を見なくてはということで、昨年11月に「被災地視察及びFJPの皆様との交流会」として東京の女性経営者30人が福島に伺いました。甚大な被害に遭われた福島県浜通りの被災地を視察、2日目は大河ドラマ「八重の桜」の舞台となった会津若松を訪問。宿泊は「陽日（ゆい）の郷（さと）あづま館」でお世話になりました。

――　実際に福島の女性経営者の方々と交流した感想は？

佐川　会員総出で、宿泊までして至れり尽くせりのお心遣い、福島の女性の人情のあつさ、逆境の中から立ち上がる力強さを感じました。いきいきとして皆きれい。そして熱い。

この視察では、語り人一号の青木淑子さん（富岡高校元校長）のお話が心に残りました。

遅々として進まない国の方針、戸惑う人々、人間の尊厳についての青木先生の深いお話に、「福島のために何かをしなくてはならない」と強い思いで帰って参りました。

――　原子力発電所の事故で、故郷に帰れない人もいるわけですから、非常に重いですね。

佐川　未だ震災の爪痕が残る被災地、改めて風化させてはならないと感じました。

――　その活動の過程で長谷川さんと知り合われた？

佐川　はい。初日のランチが美人女将で有名な割烹一平さんでした。女将さんは地域復興のキーパーソンの一人とも言われていますものね。

長谷川　私は佐川社長に「初めてお会いしたような気がしま

対談
地に足を着けて、とにかく前へ！

せん」と話しかけさせていただきました。なぜかというと、私は30年以上前から『財界』を購読しておりまして、佐川社長がご登場しておられる姿も拝見していたからです。それで「『財界』は私にとって教科書のようなものなんですよ」というお話をさせていただいたのです。

―― 長谷川さんもそうですが、福島県の女性経営者は非常に自立されていて、佐川さんがいわれるように非常に熱いものを持っておられる。その理由をどう考えますか。

さがわ・やえこ
1944年千葉県生まれ。63年文化服装学院本科修了、ゴルフ会員権販売会社2社を経て、70年桜ゴルフ創業。東京ニュービジネス協議会創立メンバー、東京産業人クラブ常任理事。

佐川 やはり福島は教育が良いのではないかと感じます。例えば「ならぬことはならぬものです」で知られる、会津藩の「什の掟」が基本にあるのではないかと思います。皆様とても礼儀正しく信義に厚いと感じます。非常に素晴らしいですね。

―― 藩の教育は今に生きていますね。かつては小藩でも教育がしっかりしていました。福島でも伝統が受け継がれていると。

長谷川 そう思います。福島県人は、確かにみんな自立している面があると思います。いわきもそうです。原発事故がなければ、早く復興できたのではないかと思っています。

「これ以上の底はない」という言葉で営業再開

―― 原発事故で街から人が離れてしまったんですね。

長谷川 そうです。3・11以降、いわきから他の土地に避難してしまいました。お医者さんもいなかったくらいです。

佐川 長谷川さんは、その時どうしたんですか。

長谷川 弟が避難をしようと言うので、独身の従業員は全員連れて、最初は茨城県のつくばに2泊、その後栃木県の那須に1週間ほど滞在しました。

生きていくためには商売をしなくてはなりません。しかし、原発事故で商売が続けられないかもしれないと言われ始めていました。「パンドラの箱」が開いたなとつくづく思いました。

お店をやめることも考えていましたが、いわきに帰ってきたところ、いわき市役所の人達がお店の状況を見て「これなら営業ができる」と言って、明かりを点けてくれたのです。

そして、近くにある水族館・アクアマリンふくしまの館長さんも「これ以上の底はない。これから上がるだけだから頑張ろう」と背中を押してくれました。それでもう一度、この地でお店を続けようと思えたのです。

―― 津波による、お店の被害はどうでしたか。

長谷川 この周辺は7～8㍍の津波に襲われ、多くの自動車が流されてきていました。しかし、お店には玄関と宴会場に少し水が入ったくらいでした。運がよかったですね。

そうして、11年4月26日に営業を再開しました。しかし、お客様はなかなか来ませんでしたので、それならばと冷蔵庫の中の食材を使って3日間、ボランティアでお昼ご飯を周辺の皆様に食べていただきました。

今も難しい状況には変わりありませんが、お客様に支えられています。私達は本当にお客様に恵まれています。

何をしたら相手が喜ぶかを考える

―― ところで、長谷川さんはテレビプロデューサーの石井ふく子さんと親交があるそうですが、どういうご縁ですか。

長谷川 いわきの観光協会が、塩屋埼灯台に美空ひばりさんの歌碑を作ることになった際に、石井先生の所にご挨拶に行き、実際に現地にも来ていただいたのが最初です。

はせがわ・まさこ
1937年東京都生まれ、福島県育ち。57年県立高校を卒業、同年、日本舞踊・花柳流師範となる。66年に母の跡を継ぎ、割烹一平の2代目女将に就任。社会福祉法人愛篤福祉会理事も務める。

それ以来、石井先生は東京のご出身ですが「いわきがふるさとだ」と言ってくださるんです。石井先生を連れてきた観光協会の会長さんはお亡くなりになりましたが、このつながりを大事にしようということで、歴代いわき市長を含め、今も交流を続けています。

さらに、石井先生がプロデュースして、09年にテレビ朝日で放映された『結婚』というドラマがあります。渡哲也さん、若尾文子さん、上戸彩さんが出演されたのですが、石原プロモーションの方々も含め、皆さん当店にお越しになって食事をされたんです。

放映が終わってしばらくして、観光協会で石井先生を囲む会を開催した時に、『結婚』のモデルは割烹一平の女将さんだ、とおっしゃるので本当にびっくりしました。今でも先生にお会いすると「ドラマを盛り上げるために、お役に立てなくて申し訳ありません」と申し上げているくらいです。

―― 石井さんは、非常に強いこだわりを持ってドラマづくりに取り組まれる方ですね。

長谷川 ええ。石井先生はお芝居を作るにあたって「この人でなければ駄目だ」と思ったら、どこまでも追求するんです。

例えば『ありがとう』で主演をした水前寺清子さんは歌手ですから「演技はできません」と断られていましたが、3、4年追いかけて口説き落としたのです。放映したら大ヒットになったんですね。

また、美空ひばりさんのために『恋桜』というシナリオを書いて演出をしたのですが、ひばりさんが亡くなられてしまいました。その後は「ひばりさんのためのものだから」ということで、一切誰にもやらせていません。今でも守っておられます。芯が強く、同時に優しい方です。

―― 長谷川さん、50年間心がけてきたことは何ですか。

長谷川 「おもてなし」と言いますが、その方が何をしたら喜ぶかを常に考えることだと思います。お料理から何から、全てを親切、丁寧に、その方の気持ちになってご提供することを心がけてきました。

また、母からは売り手よし、買い手よし、世間よしという近江商人の「三方よし」の生き方をしなさいと言われてきました。

佐川 私は長谷川さんに、東京・銀座に支店を出されたらいかがですか?とお話をしているんです。そうしたら、私も食べに行きます(笑)。

長谷川 本当に佐川社長とのご縁を嬉しく思っております。

現地レポート

震災から5年が経過、復興は道半ばだが、福島で自立する女性経営者達――

福島の地で事業を起こす！
～互いに互いを励まして～

震災から5年が経過しながら、未だに放射性物質の影響で故郷に戻れない町が存在するなど、復興は道半ばの福島県。気持ちが折れそうになることもあるが、「とにかく前へ」と自らの足で立ち、活動を続ける女性経営者達がいる。そして女性がますます活躍できる舞台を広げようと活動しているのが「福島県女性経営者プラザ」（FJP）。彼女達が今後目指すものとは――。

本誌・大浦 秀和 text by Ohura Hidekazu

東京と福島で女性経営者の交流

2011年3月11日の東日本大震災から5年が経過したが、復興は道半ば。だが、そんな中でも福島には力強い足取りで自立をしている人たちがいる。

いわき市にある創業80年の老舗料亭「割烹一平」は地元を訪れる経済人にも愛される名店。16年9月16日、この料亭に福島県で活動する女性経営者達が集まった。彼女達は「福島県女性経営者プラザ」（FJP）に所属する経営者。

FJPは、1995年11月設立の福島県の女性経営者だけの交流グループ。毎月の定例会を軸に、女性経営者同士での異業種交流と自己研鑽を積むことで、女性経営者が活躍しやすい経営風土の実現を目指している。

このFJPと東京の産業界との橋渡しが、創業46周年のゴルフ会員権の老舗・桜ゴルフ社長で、東京産業人クラブ女性部会会長を務める佐川八重子氏。

佐川氏がFJPのメンバーを東京に招待したことで交流が始まった。さらに、佐川氏ら東京産業人クラブ女性部会のメンバーが福島を訪問して懇親会を開催した他、被災地を巡った。

今年度から、FJPの会長を務めるのが上石美代子（あげいし）氏。注力しているのが、「女子学生懸賞作文募集」。今回で第3回目となる。

本籍または現住所が福島県という女子学生を対象に、東日本大震災を乗り越えて、新たなビジネスの創造や、女性経営者として次代を担って欲しいとの思いを込めて募集。佐川氏も昨年から審査委員を務める。

「最近、若者から本心からの話を聞くことは少ないのですが、作文だと本心を読むことができます。涙なくしては読めない感じです」と上石氏。

上石氏自身は創業63年の郡山トラック運送代表取締役として運送業を営む。引越しが売上高の20％程度、他には地元の食品スーパー・ヨークベニマルなどの配送を手がける。父親の跡を継いだ2代目。

悩みはやはり人手不足。「震災以降は求人をしても難しい状況。今いる人材の中で、きちんと仕事をやることを根本に置いて仕事をしています」と話す。

上石美代子・郡山トラック運送代表取締役

テレワークの草分けと国際色豊かな飲食店

「職住隣接という発想で、お母さん方が働ける職場を作ろうと仕事をしてきました」と話す、いわきテレワークセンター代表取締役の会田和子氏。同社は94年に設立した、純民間テレワーク企業の第1号。150名体制のコールセンターを含むオフィス勤務業務の他、130名の在宅ワーカーを擁してアウトソーシング業務を行う。

会田氏は88年からニューメディア・テレコミュニケーション分野の調査研究、マーケティングに従事。03年に、内閣府・経済産業省による「地域産業おこしに燃える人」全国33人の1人として選定された。

テレワークは、行政が支援する「公的施設」が多かったが、会田氏は「準備に時間がかかり、意思決定が遅くなる」と純民間で会社を立ち上げた。

震災後には、やはり社員数は減少。これを機に、創業20年以上で培ったノウハウを基盤に、「事業の見直しを進めています」（同）。主力事業であるコールセンターは設備負担が大きい上に、価格競争も激しい。「今後はモノのインターネットでより質の高いサービス提供が鍵」（同）。事業の再構築でさらなる女性活躍の舞台づくりに挑戦中。

「東京生まれの東京育ちですが、郡山に来て、初めて飲食業に携わりました」と話すのはオリエンタル・オーブン代表取締役の澤上春江氏。「郡山は一生懸命仕事をしていると、一生懸命応援してくださるんです。皆さんに住んでいただきたい街です」と話す澤上氏は、主婦業から転身して33年、「サワカミ&サングループ」で4店舗を運営。

店舗スタッフにはベトナム人、スリランカ人、韓国人など、国際色豊かな人材が揃い、ベトナムにも店舗展開をしている。

前述の「女子学生懸賞作文」の第2回で、澤上氏のお店のベトナム人スタッフが応募、佐川氏が授与する「桜賞」を受賞。「彼女達は真面目で優秀。私も学びが多いんです」と澤上氏。

震災後は、店に品物が入荷されなかったり、グループの1店を指定で食べに来ていた大企業が店の放射性物質の濃度を測定していたりと「辛い思いをしましたが、他の県内の方々が頑張っている姿を見て、私も頑張っていられます」と力を込める。

「女手一つ」で生き抜く力強い経営者

「女手一つで生きていくために会社を作りました」と話すのはアンプラン代表取締役の長尾千代美氏。

郡山市で土木建築工事、鍵や防犯カメラなどのセキュリティ、住宅リフォームといった事業を手がけている。

前職の時に取引があった旧コマツゼノアとの取引を継続するために会社を立ち上げて10年が経つ。長尾氏は兵庫県淡路島の出身で、郡山に来て25年。

最近は、他社で仕事をしていた息子さんとともに事業を進めたいと考えて、会社の将来を模索していた。目をつけたのが空き家対策や、元気な高齢者のためのシェアハウス。

会田和子・いわきテレワークセンター代表取締役

澤上春江・オリエンタル・オーブン代表取締役

長尾千代美・アンプラン代表取締役

地に足を着けて、とにかく前へ!

瀬戸孝子・東北環境センター代表取締役

高齢者シェアハウスは動き出したばかり。

「元気な高齢者が家で寂しい思いをしているケースが多いんです。その方々が自分の力で楽しく暮らせる場所を作りたいと考えてきて、ようやく形ができてきました」(長尾氏)

モットーは、「お取引先様の『引き出し』」になること。「何かお客様が困ってご相談をいただいた時に、ご提案ができる存在でありたいんです」と話す長尾氏だ。

東北環境センター代表取締役の瀬戸孝子氏は、一般・産業廃棄物の収集運搬業の他、家事サポートや高齢者サービス、リサイクル事業に取り組む。

瀬戸氏の地元は郡山。起業のきっかけは、パート先の社長から「これからはゴミの時代になる」とアドバイスされたこと。

「女性の目線で廃棄物の仕事に取り組むのはいいのではないかと思ったんです」(瀬戸氏)

だが、軌道に乗るまでは苦労の連続。最初は親族からの仕事を、市から払い下げを受けた35万円のゴミ収集車から始めた。さらに、社長を務めて7年経った95年には会社を乗っ取られるという事態にも遭った。

それでも、瀬戸氏個人の信用で市からの事業を何とか継続。自らゴミ収集車やダンプトラックを運転して仕事に取り組む日々だったが、ここ1、2年は「車に乗らなくてもよくなりました」(瀬戸氏)と笑う。

「出た廃棄物を責任を持って運搬・処分する」(同)として、今は廃油を回収し、自社でバイオ燃料にして自動車や発電機の燃料として活用。

「今後も環境にいい、リサイクルの仕事をしていきたい」(同)と展望を語る。

東京から福島へ その思いは……

「郡山で広告の仕事を始めて42年になります」と話すのは、企画室・コア代表取締役の三田公美子氏。

三田氏は広告の企画・制作・代理業務に取り組んできたが、84年に郡山の生活情報を伝える「ザ・ウィークリー」という無料情報紙を発刊。現在も毎週宅配で12万部発行している。

信念は、「良い広告は、良い生活情報である」ということ。そのため、「良い広告が集まれば、良い生活情報紙ができるはず」というのが三田氏の考え。

今、注力しているのが、元福島県知事の佐藤栄佐久氏が執筆した書籍を基にして製作中のドキュメンタリー映画『「知事抹殺」の真実』の存在を広めること。

三田公美子・企画室・コア代表取締役

三田氏はFJPの第2代、4代の会長を務めてきた。2代目会長として活動を軌道に乗せ、バトンタッチをしたが、東日本大震災によって3代目会長が避難を余儀なくされてしまった。そこで、前任会長だった三田氏が4代目を引き継いだ。そんな三田氏を、いわき市で不動産業を営む、株式会社郷(さと)代表取締役の佐藤光代氏など経験豊富な経営者が支えた。

会長在任中にFJPは設立20周年を迎え、前述の女子学生作文募集も始めた。三田氏が蒔いた種が着実に育っている。

本社を東京に置きながら、福島で仕事に打ち込む人もいる。ビーズスタッフ代表取締役の山本欣子(たしこ)氏だ。山本氏は東京産業人クラブ女性部会のメンバーで、桜ゴルフの佐川氏に福島との交流を提案した。

設計者を大企業の研究開発部門に派遣する特定人材派遣業を営む。

震災時に、顧客がいた宮城県仙台市を訪問、「最初は軽い気持ちでした」と振り返るが、当時は自衛隊が行方不明者の捜索をするなど現場は混沌状況。

「どうしたら、私の軽はずみな行動を許してもらえるだろうか? と考え、貢献できるのは雇用支援だと考えました」(山本氏)

山本欣子・ビーズスタッフ代表取締役

最初は仙台に事業所を作ろうと考えていたが、三田氏と出会い、その強い要請で郡山に事業所を設立。

だが、新規事業の電子書籍のために見込んでいた助成金は大手の手に渡って活用できず、さらに社員10人が「残業をしたくない」と一斉に退職。

だが山本氏は諦めなかった。10月から東京の社業を息子さんに任せ、山本氏は郡山で本格的に人材育成活動を始めた。

なぜ、福島にこだわるのか?

「本当に福島の人達が好きなんです。福島で仕事をしてみて『こんなにも温かい場所があったんだ』と感じました。何としても恩返しをしたい」と山本氏。

FJP会員ではないが、今回特別参加したのが、NPO法人「富岡町3・11を語る会代表」を務める青木淑子氏。7月に発足したNPOで、青木氏はそれまで38年間教員を務めてきた。

青木淑子・富岡町3・11を語る会代表

東京都出身の青木氏は郡山在住。04年から08年まで富岡高校の校長を務めた。

04年に富岡高校には、学科再編で「国際・スポーツ科」が設置された。それによってサッカー、ゴルフ、バドミントンの強化が進み、有望選手が輩出するようになった。

だが、震災で状況は一変してしまう。東電福島第一原発事故の影響で、「富岡町は今も、朝9時から夕方4時までは町に入ることはできますが住むことはできません。さらに16歳以下は立ち入りもできないんです」(青木氏)。

青木氏ら旧教職員有志は「母校で校歌を歌い隊!」を結成。月に1回、第3日曜日の午前10時に富岡高校前に集まり、校歌を歌って解散するという。故郷を思う気持ちがエネルギー源になっている。

富岡町では来年4月の帰還開始を目指すが、「お年寄りばかりで、故郷を覚えていない若者が戻ってこなかったら、という危機感があります。そこで今、必死で伝承に力を入れているのです」と「語り人(べ)」の仕事に注力する動機を語る。

「私は富岡町が好きなんです」と青木氏は言う。

「決して諦めない」――。どの経営者、リーダーも自らの道を必死で切り拓きつつ、「町が好き、人が好き」という思いは共通している。

復興への道のりは長いが、こうした女性リーダー達がいる福島には「地力」がある。その「地力」を育んでいるのは人と人のつながり、「絆」である。